



グラビア印刷機械の草分け時代 『この道こそ』

(1) 新居の関所

史談会開催日

昭和44年(1969年)7月29日

■ 語る人

石田 善通 氏

(石田グラビア株式会社社長)

■ 【石田善通氏略歴】・

・明治27年10月24日静岡県に生れる。
大正9年春、三間印刷所において研究を始める。大正9年11月第1期の機械製作をする。昭和元年、三間先生病没のため三間印刷の研究を引退する。独立して研究を続ける。

私と三間先生が開発した石田グラビア機械、枚葉機械が出来るまでの話しをとのご要望でありましたが、私がこの席でお話しをするというような者ではないのですが、47年間の色々な苦勞などを私なりの考えと思い出を座談的に話してまいりたいと思います。

グラビア印刷機におきましては私が誠心誠意つくりましたことは間違いありませんが、しかし、あの三間隆次先生という偉大な方の力があつたからこそ、あのグラビア印刷機が完成したので、まず三間先生の話しから始めて、亡き先生を広くご紹介申し上げたいと思います。

私と三間先生との結びつきから申しますが、第一に私の生い立ちを簡単に述べたいと思います。

私は静岡県の西岸で、東海道の新居の関所のあつたところで明治21年に生まれました。徳川幕府の盛んな時代には大変繁華な宿でありましたが、明治30年頃は次第に寂れて、私の子供の頃はその繁華は昔の夢となり、半農半漁の前途誠に心細い1部落となりましたのであります。そのためか青少年のものの考え方は、今日の青少年とは大分違って、その後の親達の仕付け方も違っていったように思います。それに私は貧しい家に生れ、ことに5人兄弟の末っ子でありまして、一層独立心と言いましようか自分の身を立て一家を支えたいと考え、12才の時に小学高等1年で両親の反対を押し切って退学してしまいました。それから奉公先を捜し、14才の時に名古屋市の豊田織機会社に勤めることになりまして、生れて初めて機械というものを見てその素晴らしい威力に少なからず感動して、何か違った国にでもきたような気持で、それまでに機械といえば自転車と汽車ぐらいしか見たことがなかったからでもありましよう。

その頃の御仁で豊田佐吉先生は、私の故郷の隣り村で山口村という40石しかない村の大工さんでありましたが、沢山の発明を遂げ、日本でも有名な大発明家となられた方です。私は先生の自宅のすぐ近くに勤めておったので、その機械と研究に心を惹かれて16才の夏に東京に出て機械の職工になる決心をいたしました。

(2) 先生との出逢い

当時、京橋区築地にありました徳田鉄工所に22才の盆まで5年間の年期奉公をしました。徴兵検査も補充に編入になったので、ご主人にならい、築地の工手学校の夜間部に入学し、機械科を卒業したので少しばかり機械の技術屋らしいものになりました。

私が26才の頃、第一次大戦のために日本にそれまで輸入されていたアート紙が途絶しました。そのアート紙、つや紙、その他加工紙の研究を所々で始めましたので、その機械類を私の勤めている徳田鉄工所に依頼があり、私が大部分の研究と製作を授けておりましたので、多少経験があるのも認められました。そのころ色々機械の修理にお出入りしていた築地の三間印刷のご主人からお話があり、28才のときに計画的に三間先生のご指導のもとに地金の研究をすることになりまして、新宿角筈に520坪の敷地を求め、150坪の工場を建てて、この研究を私が授け、紙の加工とその他必要な機械の制作をして、万端に渡り先生のご指示で何年間か、制作半分、研究半分の仕事を続けておりましたが、戦争も終わって、アート紙や加工紙の輸入が盛んになってきましたので、自然に私の仕事も暇になってまいりました。そんな頃に確か大正8年の春頃だと記憶しておりますが三間先生から急に電話があって、本郷のお宅まで行きましたら、グラビアの印刷機のお話しでした。その当時、先生からグラビア印刷やグラビア機械のお話しを伺っても、私にはまるで夢のような話しでしたが、先生は大変ご熱心に見聞してこられたグラビアについての話しを印刷物を見せながら、その素晴らしい特徴を説明してくださいました。そんなわけで私がグラビア印刷に入る体制となりました。

私の知る範囲で三間先生のお人柄を紹介しますと、先生は大阪堂島の谷口印刷所のご次男に生まれまして、おじい様が凸版印刷機の発明に成功された方で、東京の築地活版の設立にも何か深い関係があられたようです。三間先生は慶応大学を卒業されて三間印刷の長女である方と結婚されて三間印刷所の若主人となりましたが、当時の



三間印刷所は、活版が主で営業部もお住いと一緒で銀座の2丁目にありました。

若主人の隆次先生が何年か後に平版部の工場を建て、石版、アミル版、印刷機を数台入れて、技術者を迎え、高級印刷の製版及び印刷の研究に努力されたことは皆様も多分ご存じの通りだと思います。ポスター、カレンダー、表紙類の高級印刷専門にだんだんと前進して、私の出入りした大正3年頃には石版オフセットとの他に20数台の印刷機を据え付けて日本でも有名な工場でありました。

先生が欧米から帰られまして、ますます業界の進歩を余儀なくされたときに、ちょうど私がお役に立つべく入社したわけでございます。先生についての逸話も沢山ございますが、大正の初めに欧米業界の視察に行かれたときも、グラビア印刷の実習をするために、機械を借りたという話を後日聞きました。

先生は48歳にして亡くなられたが、多能であった方なので返す返すも残念でした。

(3) ドクターの苦勞

三間先生のお人柄に私が和み、先生が私を信じ励ましてくださったことが、グラビア機械が出来上がった源でございます。

これから石田グラビア印刷機のお話をいたしますが、当時日本にはグラビア印刷、グラビア機械に対しては希望者はありましたが、まだ完成しているところはありませんで、その時に三間先生が欧米で見て帰られたグラビア印刷機を思い出し私に話をされたわけですが、欧米のグラビア印刷機は版が転倒式で、機械の他にシリンダー胴巻き、グラインダー、メッキ装置等が必要で、製版に多額の設備費を要し、その上製版コストは非常に高価になるので、当時の日本では印刷業として成り立たないことになり、そこで、日本でやれるためには、銅版に製版して印刷の出来る機械が出来たなら、ぜひグラビア印刷に着手しようと思っているので制作してほしいとお話ししました。このグラビアの版式によってのみ、将来グラビア印刷の発展を期待出来るということになり、欧米の刷り物またグラビアの版式の説明、印刷の原理、印刷の工程等を聞きまして、インキはバットの中一杯に入れ、版の全面に着くようにし、次にドクターは0.3ミリぐらいの厚さのヘラで、このインキを掻き取る。インキは元の



バットの中に滝のように落ちて行く、と言うこの説明の他は、他の印刷工程と同じだということで、私としてはグラビア印刷機のカタログ、写真、図面などが一切無し。また先生のお話だけではいかにも自信がもてないので、2、3日考えた結果、ドクターで掻き取る点が納得出来ないで、それにアルミ印刷機にバット及びドクターを取り付けてみて、インキの掻き取る状態を実験化して色々試してみたところ、銅版がデコボコのために、むろん不完全ではありましたがある部分ではインキが掻き取れて、写真が印刷される事実をみて初めて私の決心がつけました。それで、新しい機械の設計図に着手しまして機械のほうは、私の本業なので無事に仕上がりました。この時は大正9年の7月でした。

この9年という年は博覧会の前の年のように記憶しておりますが、このとき始めて仕事として印刷しましたが、普通の銅の版ではグラビア印刷は出来ないという事実を立て、私は奈落の底に突き落された苦しい思いをしました。それは第一に銅板の質が悪くて、銅の内部に微細な不純物があって、ドクターに傷がつき、その結果、印刷物の表面に雨が降ったような細かな縦縞が出て、少数の印刷も不可能で、しかも博覧会のアルバムの印刷物を引受けているので、神経を使いました。当時ドクターと名のつくようなものが何もない時分で、時計のゼンマイなどを用いている始末で急にドクターの品質の研究をすることになりました。

色々考えた末、当時最高の硬度を持つタングステンチールの棒を延ばし研磨して、厚さ0.3ミリのドクターになるように2昼夜、不眠不休で作り、ようやく1本だけ仕上がりました。これを持って翌日築地の工場へ行き試刷りを始めましたとき、千枚、2千枚と続けて出てくる刷り物を見たときの喜びは、私の一生涯の喜びの思い出となりました。これは今から37年前のことで、その時の日本の印刷界は、オフセット印刷機が出始めた頃でした。とにかく、ドクターについての苦労は言葉に尽くせない程のものがあります。



(4) 生きる道

その当時、松島先生が私にどれほどか力を入れてくださったことは今でも感謝に絶えません。三間先生が亡くなって、いよいよ自分の生きる道がなくなったから機械工場の技術屋になろうか、それともグラビアの仕事を活かすためにもっと努力しようかと思っ随分考えましたが、どうしても10年間苦勞したい機械をモノにしたい

と思い、しかし、資本もなければ力もありませんでしたが、苦しんで小さな機械を作って努力しようと決心しました。ちょうど私が40のときでした。

恵比寿に第一グラビアというのが出来まして、その時に私も、松島さんもその会社に関わりがありまして、それで松島さんが伊東先生とお話しをした時に、伊東先生はその会社の技師でもありましたから、そんな和製の機械で、グラビアなんか刷れるものかというようなことを言われましたが、事実私の苦勞したことが、何年か松島さんも見てこられたと思いますが、いや実際刷れるんだからといって会って話しをしたほうがいいということになりました。始めて第一グラビアに小さなオモチャみたいな機械でしたが刷ったものを持って行きました。ちょうどその日は第一グラビアで会議があった日で、第一グラビアの大きな機械で刷ったものと、私の造った小さな機械で刷ったものを、比べてみると、どっちがどっちで刷ったものか区別がつかないぐらいで、非常に私は嬉しく思ったのを憶えています。

それから小さな仕事をその第一グラビアさんからいただいて、ようやく私の生きていく道が開けたという感じでした。それから苦しいながらも小さくボチボチやりながら機械を改良して、ライト印刷さん、凸版さんなどに納めました。機械は私が売っただけでも5、60台はありましようが、あまりにもその機械が売れまして、機械を売れば、製版のことや印刷のことを指導してやらなければ、買った方も困るだろうと思ひまして、そっちのほうが忙しくなっていました。機械を造って売るほうを私の弟子の田中というのが担当して、まあ、誰が造っても役に立てばいいということで、私が手を引きました。そのうち戦争のために、強制疎開で田舎に3年ばかり遊びましたが、60過ぎてから再び東京に戻りまして、色々と考えた結果、同盟通信社に入っていた私の機械が信州の山の中に据わっている、君がやるのなら持って来て、共同でやろうじゃないかという話が起りまして大同グラビアを始めました。そこで会社組織で始めたわけですが、私などは一介の職工ですから、到底会社の方々と一緒に解け合いませんで、もうひとつは他から、機械を造れと言われてまして私も自分で印刷をするということ以外に能がありませんし、機械の立派なものを残して死にたいと思いましたから、小森鉄工所に話したところ是非うちで造るから君がやってくれるならということでしたが、機械を売ると、また私が売った先に行かなければならないので、結局、小森さんから身を引きました。そのうちにだんだんと世の中も変わって忙がしく仕事も出てきましたので、少しぐらいの金なら都合するからうちの機械を造ってくれとかいってく



ださる方々がいました。そういう皆様のご援助で今日の石田の工場が保ってきているのだと思います。それにしても、私ごとき者の造った機械がお役に立って、そしてだんだんとグラビアが進歩してきたことは、大変結構なことだと思います。誠に申し訳ないようなことばかりですが、私は私なりに苦勞したということを皆様にわかっていただければ倅いに存じます。

